

〈近世女性史資料(18)〉

女大學教文庫 (3)

— 書誌・翻刻 —

若 林 俊 英^{*1}
黄 色 瑞 華^{*2}

<Early Modern Women's History Research Materials(18)>
ONNA DAIGAKU OSHIE BUNKO(3)
—Text and Bibliography—

WAKABAYASHI Toshihide*¹
OHSHIKI Zuike*²

-
- * 1 城西大学教授
* 2 元城西大学教授

一 書 誌

所蔵 城西大学国際文化研究所

書型 半紙本一冊。縦二四・九センチ。横一七・五センチ。

表紙 厚紙の上に鉄紺色無地

極薄紙を貼る。ただ

し、少々湮滅。中央上

部に「世の婦女の翫弄

に備ふ書籍のあまた云

々」の貼紙。



題簽 左肩。白紙四周枠。縦一五・九センチ。横三・八センチ。

『女大學教文庫』

綴糸 白色綿糸二本掛。ただし、後綴。

内題 女大學

丁数 全三八丁。墨付七六面。

各面 六行（本文）。

柱刻 各面に「口の一」「口の二」、「壹」「貳」「三」「四」……

「三十六終」。

匡郭 縦一二・八センチ。横一四・八センチ。

注 本文末尾に「益軒貝原先生述」。

奥付 天保十四年癸卯七月

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 式丁目

山城屋佐兵衛

同 浅草芽町二丁目

須原屋伊八

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 中橋廣小路

西宮弥兵衛

大坂心齋橋久宝寺町

堺屋新兵衛

同 安堂寺町心齋橋

播磨屋理助版

二 翻 刻

凡 例

- 1 『女大學教文庫』の忠実な翻刻を旨とする。
- 2 使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるように配慮する。
- 3 漢字ルビはすべて原本のままとする。
- 4 行移りもすべて原本のままとし、丁移り、表裏の別は、「一オ・」一ウを以って示す。
- 5 挿絵は適宜省略し、翻刻文中にその旨を示す。

承前

○平人に執行ふべき其夜の規式
床の飭分限に應ずべし手がけ
三盃ハ必ずあるべし一番引渡し
出し三献右の如し二番雜煮
三献右の如し三番鰯の吸もの
出し三献右の如し三盃のミ
様も右のごとし三三九度はに
て濟て夫坐を立偕吸物いで
待上臈などへの盃右のごとし
此献過て嫁色を直すべし偕
夫又出て食を出す五五三にて
も又三三二にても分限に依べし
高砂の臺などあらバ此時出す
べし酒も間をすべし扱菓子
を出す五種七種或ハ折あるひハ
三宝にても偕茶出て夫立くつ
ろぐべし錫にてせバ床に飭ら
ず勝手より出すべし錫にハ蝶
を付る事なし偕色直しの事
前に記す如く嫁ハ迎小袖夫は
土産の小袖上下を著し萬分限

十六才上段

に應じ斟酌有べし
嫁舅へ見參之事

右の祝儀すミて待上臈いざな
ひて舅の所へ行べし嫁より舅
姑其外小じうと等まで小そで
樽肴相應の祝義有べし祝の
式先手おけを出し扱三盃を出
し引渡しを舅姑嫁三人へ居
舅三献のミて嫁にさす嫁二献

三盃ぞも備茶をてまどろ
び勝もつう出及へ湯火嫁
と付る事な備色直し
扱小袖及嫁ハ迎小袖夫は
土産の小袖上下を著し萬分限
ふ義ハ新儀有へ
諸男へ見參之事
右の花儀とミて待上臈いざな
ひて舅の所へ行べし嫁より舅
姑其外小じうと等まで小そで
樽肴相應の祝義有べし祝の
式先手おけを出し扱三盃を出
し引渡しを舅姑嫁三人へ居
舅三献のミて嫁にさす嫁二献

十六才上段

のむ所へ舅より引出もの有べし
 又一献加へて舅へ返す舅三献
 のミテ納るなり爰にて打躬い
 だす平人ならバ爰にて雑煮い
 たすべし姑第二の土器にて三献
 吞嫁にさし嫁二献のむ所へ姑
 より引出物有べし嫁又一献加
 えて姑にかへす姑三献のミテ



「十七才上段」

納むなり爰にて腸煮出るなり
 平人ならバ吸物たるべし第三の
 土器にて嫁一献のミテ舅に指
 舅三献のミテ嫁にかへす嫁二献
 のミテ姑にさす姑三献のミテ納
 るなり是にて舅姑嫁いづれも
 三々九度なり小舅そのほか有
 バ又吸物を出し取肴出て土器
 一ツ三寶に居て献々あるべし献
 々の次第ハ舅差圖すべし吸
 もの出さずバ摠引わたし取
 肴斗にてもよし酌此時も
 結ぶべし夫父母なくバ爰にて
 夫嫁をいざなひ父母の位牌へ
 見参すべし
 むこ入之事
 往昔ハ三ツ目の祝過て婿入せし
 かども近代ハ婚姻より前にむ
 こ入をするハ禮に所謂親迎と云
 ふに似たる様なれども又其式
 にも非ざれば古禮に復したき
 事あり三ツ目に二重手がけ置

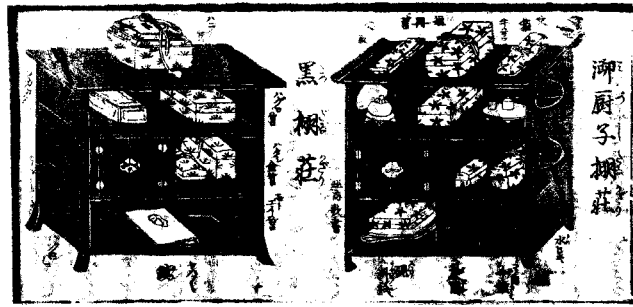
「十八才上段」

等置鯉饗膳等の飴を長持
に入舅の方へ遣ハし行器に餅
五百八十入て遣ハすべし今世
餅を半切に入てつかハすハ本式
にあらず行器いくつに成とも
入遣すべし三荷三種五荷七種
十荷十種までも人によるべし
婿入の祝儀ハ舅へ太刀小袖姑

各至親發着等の物をも
お入舅の方へ遣ハし行器に餅
五百八十入て遣ハすべし今世
餅を半切に入てつかハすハ本式
にあらず行器いくつに成とも
入遣すべし三荷三種五荷七種
十荷十種までも人によるべし
婿入の祝儀ハ舅へ太刀小袖姑

へ小袖其外小舅等まで祝儀
あるべし献々の次第ハまづ手掛
出し引渡し出し三盃出舅
三献のミテ婿にさす婿二献吞
時引出物出すべし扱一献加え
て舅へかえす舅三献のミテ
納む打躬いだす平人ならバ
雑煮たるべし婿姑三献吞で
婿にさす婿三献のミテ姑へかえ
す姑三献のミテ納む腸煮を
出す平人ならバ吸ものたるべし
婿婿三献のミテ舅へさす舅三
献のミテ納るなり是も酌右に
同じ扱吸ものにては惣引渡
しにても出一ツ土器にてミなく
献々舅差圖あるべし扱食を
出す此以後ハ分限次第なり
婚禮床飴并ニ諸道具之事
上々の婚禮ハ坐鋪も新にたて
床も三間床たるべし二間床な
らバ外に又付床あるべし二重
手懸等右に記す品々をかざる
「十九才上段

べし外に夫の衣桁に衣服を
かけ夜着ふとん等ハ納戸に
有べし女房の道具ハ前日に
事馴たる女中來かざるべし
左もなきハ色直しの間に付
来る女中かざるべし御厨子
黒棚ハ床の次の方に飭べし
黒棚ハ元袋棚といへども婚



禮にふくろと云詞をいミて
黒棚といふなり是に飭道具
置所あり貝桶ハ床に飭べし
床なくハ納戸の戸をあけて
何れも見ゆるやうにかざるべし
書物ハ書棚を持べしこれ無バ
違棚に飭るべし棚なくバ床に
置べし女房の衣桁別に衣服
を掛けてかざるべし上輩ハその
夜七ツかけ三ツ目に取かえて五
ツかけ五ツ目に三ツかけべし衣
ハ二ツも三ツも有べし手巾かけ
ハ衣桁より上坐たるべし寐
間に女房の持せたる夜著ふ
とん化粧の間なくハ爰にけ
しやう道具をかざるべし屏風
などハ其夜立べからず翌日見
合せて能所へたつべし大概
かくの如し分限に應じ斟
酌有べし舅入の事も大むね
婿入に准じ取行ふべし



二十一オ上段

著帶

懷妊五ツ月に至りて吉辰をゑ
らひて取行ふべし赤と白との
絹長さ八尺をたゝみて夫の左
の袖より渡す女房右の袖へ受
取て結び初べし是ハ當坐の
祝言迄なり右の白き絹を子
産るゝと其儘かにとり小紋を
付空色に染て子に著すべし

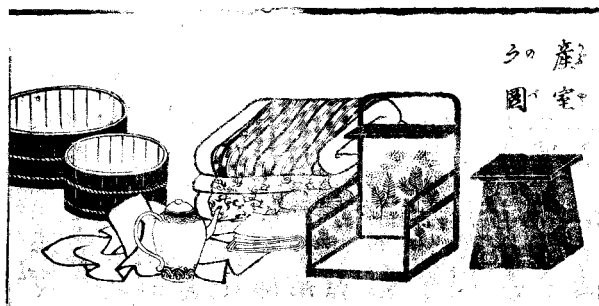
是ハうぶきにハあらずかにとり小
袖と云なり紺屋へ樽肴を遣ス
べし又帶の親とて良家の婦
人安産の人を頼ミ帶を貰ふ

もあり夫共に結び初る時ハ右の
如く是にも互に祝儀有べし
(図、略)

産道具

をし桶一對女中の打まきを入
るゝ物也ゑな桶一對寄かゝり産や
の事なり腰懸腰をいだく者の
腰かけ又子に湯をひかする時うバ
腰かけに用ゆ枕大小あまた産
婦まぐらの上さげに用ゆ湯桶
たらいひしやく何れも新しく
大小あるべしむつき二十四但し
十二ハ絹十二ハ布たるべし端少
し紅にて染べし前掛高位の
こゆ湯をひかするに足の上に直
にのせべからず是を足のうへに
敷てひかすべし風呂敷の如く
布にてすべし湯揚兒の身

を拭ふなり是も風呂敷の如く
細き布にて端ぬいをせず
色直し
こむま しろじうごにちある ひくは
兒生れて七十五日或ひ八百二
十日めに色の物を著せべしし
うぎ有べし凡兒の間ハ絹の類
著する事甚惡し陰氣を損
ひて兒の病生ずるなり故に古



二十三才上段

き事第一なり



二十四才上段

しへの人ハ堅く禁め慎めり今
世ハ生るゝより花麗の物を絶
切て著せ剩へ頭巾まで著ぬる
ハ其子を愛するとて却て損
ひ傷ることは悲もなし譬ひ
富貴の人世俗になかれて止がたく
とも兒の病を患へバ斟酌すべ

二十三才上段

喰初

男女とも生れて百二十日めに
日をゑらハす喰初有べし男
子をば男養ふべし女子をバ
女やしなふべしやうだいハ兒
を抱き出喰初の親うけとり
て左りの膝に置膳を居る也
養ふ人まづ飯の祭飯を取て
手元の膳の隅に置扱そと三
箸くゝめて汁を哺る體ある
べし○餅五ツ膳の左の際に
居ゆべし是をも三箸養ふ
なり○右の祝儀すみて後見
の人に渡すべし扱三さかづき
を出し引渡出喰初の親三
献のミ初め兒にさす兒二献
する所へ親より引出物あり
又兒一献のミて打躬出又兒
三献のミて親くゝさす親三献
のミて腸煮出又親一献のミて
兒にさす兒三献のミて親へ
返す親一献のむ所へ兒より引

二十四ウ上段



二十五ウ上段

出物ありて親また一献のミて
納むべし兒の方にハ後見あ
るべし本式かくのごとし又は
引渡し雑煮吸ものにて
も分限によるべし○女子ハ
女の親を取べし相應の引
出もの互に有べし盃前二同じ

二十五オ上段

髪置

男女ともに三才の十一月十五日
 日たるべし是も親を頼べし
 親の方より廣ぶたに櫛はさ
 み元ゆひ水引わたのし各
 一把藁七すじ以上七種を
 添て出すべし○兒を吉方へ
 向ハせ髪置のおや差寄男
 子ハ左の鬢を三銚右の鬢を
 三はさみ挾ミて扱綿一把のべて
 額より後へ長くかけ其下に
 のしと藁七筋とを入わたに
 取そへ根を元ゆひにて男結
 びに兩ハなに結その次をミづ
 引にて二筋に女むすびにと

（図、略）

「二十六ウ」上段

（図、略）

「二十七オ」上段

るなり三三九度の祝ひ喰初
 におなじ

袴著

袴著ハ四歳の十一月十五日た
 るべし是も親を取べしおや

より上下を出す色ハ大かたか
 ちん鶴龜松竹を付べし兒
 を碁盤の上に吉方に向ハせ
 て立せ後見兩人左右に有
 べし祝義の式同前

元服

本式の元服といへるハ頭にか
 んむりを加ふるを云今世俗に
 用ゆべき事にあらざれば爰
 に略す○十五以上其人の器

（図、略）

量に隨ひ吉日良辰をゑら
 ひて取行ふべし是より成
 人の道にして眞の男と云者
 なれば其禮重んじ慎べき
 なり○有徳の人をゑばし親
 に頼むべし實名ハこれより
 前にきハむべけれども若この
 時まで實名定まらずば此
 日名のりをも其人より受べ
 し世俗額に角を入るを半
 元服といひ前髪を取を元

服と云半元服まへハふり袖也
 半元服のとき袖をも直す
 ことなり然るに土俗にて丸
 額の内より袖を止ぬるハ一統
 二十八ウ上段



二十九オ上段

の禮にハあらず悪き風俗なり
 ○まづ草の引渡し出し土器
 一ツ小角に居へ出親三献のミ
 二十九オ上段

て子にさし子三献のミて親へ
 返す親三献のミて納め髪を
 結ふべし○髪のかみに眞
 行草あり髪はやし様あり
 然とも是ハ本式の元服にて
 前髪を剃おとす事にハあら
 ず冠えぼしを著する人の事
 なれば今衆人一統月代をそ
 るの禮にハ用ひがたしといへど
 もたとへ月代ハ剃とも實の
 元服の禮を行ハんと思ハ、此
 禮あるべき事なり有職の人
 二十九ウ上段

(図、略)

にならひ知べし今月代を
 剃を以て元服とせばえぼし
 親元服の人に向ひて法のごと
 く髪を結するか又は前がミを
 法の如く結ひて前髪ばかり
 を彼柳の盤にあてかの小刀
 にてはやして可ならんか又
 ハ髪を結髪をはやす作法
 ハ式の如くしてえぼし子次の

左の袖へ入て次の間にたつて



「三十一才上段」

間へ立月代を剃て出るも
可ならんか月代を剃の禮ハ
古來より禮家になけれバ元
服の式を以て斟酌して可
ならん○はやしたる髪は
主の知ぬやうにゑぼしおや

「三十才上段」

後見の人に渡す後見の人
紙に包ミテ氏神の社に納
むべしとはいへども社へおさ
むるハ然るべからず是ハ能認て
我身を終るまで家に有べし
父母の恩を忘れざる一助とも
ならんか死ハ棺に入て可成
べし祝義の次第引渡し
打躬腸煮九献の酒さき
に記すに同じ此献すぎ
て後の饗應分限による
べし

終

「三十一才上段」

婚禮祝儀の文

一筆申あげまいらせ候

左様候へハ御子息様

御婚禮首尾よく

御整遊バシ候の由

鶴龜の久しきこと

ぶき千代よろづ

世も盡せぬ御めで

たさ限のふ存まいらせ候

御満足ごまんぞくの程ほど

押量おしかり

此この

方はうにても

せんどく御おん

悦よろこび申上まじあげまいらせ候

扱さては左少させうなる品しな

に候へども御おんまな

一折御歡ひとをりをんごひの證とるしまで
三十四才上段

御目おんめに懸かけまいらせ候

猶なほ御げんにゆるく

申上まじあげませ候べく候

めでたくかしく

月日つきひ

髮置祝儀文かみおきしうぎぶみ

文ふみにて申上まじあげまいらせ候

時分じぶんがら殊こと之外ほか

寒さむさつよくおはし

まし候へどもいよく
三十四才上段

御替をんからせなふ御入をんいり

遊あそばし御嬉をんうれく存ぞんじ

まいらせ候左様さやう候へバ今こん

もじハ御日柄能御愛をんひがらよくごあい

子様御成人しさまごせいじんにて

御髮置遊をんかみおきあそばし

まんく御め度おんめでたく

存上ぞんじあげまいらせ候今朝けさ

ほどハはやぐくと

御越下こしくだされ殊ことに
三十五才上段

御土産ごどさんニあづかり

忝かたじけなくひき幾久をんいしく御岩おんいわ

井申上いもじあげまいらせ候かつ

亦また廉末れんまつの御事おんことにて

おはしまし候へども

御扇子壹箱聊をんせんすひとばしちやうが

御歡申上おんごひまじあげまいらせ候印しるし

迄御目までおんめに懸かけまいらせ候

まづハあらくめで

たくかしく

月日つきひ
三十五才上段

小笠原折形盡

(図、略)
三十六才上段

(図、略)
三十六才上段